伝統方言の記述と比較方法
—島根県出雲仁多方言の音韻論から—

平子達也（南山大学）

1　はじめに

(1-1)　出雲方言：島根県東部の出雲地域で話される方言の総称

- 鳥取県西部で話される西伯方言と合わせて雲伯方言と呼ばれる
- 非西日本的特徴（廣戸 1950: 3）
  - コピュラの=*da*
  - 「買う」など w 語幹動詞（ワ行五段動詞）における促音便形（「買った」*kat-ta*）
- 「島根県地方の方言には現在でも他とは異なる著しい特徴がある。（中略）日本語の歴史を考えるには，この地方の方言の精密な記述的研究も非常に必要だと思う」（服部 1976a[2018: 79]）

(1-2)　中央方言：上代以来「都」が置かれてきた京・奈良のことば

- 京と奈良の言語差もあったか
- 地理的にどこまで「都」の力が及んでいたか

(1-3)　日本祖語　cf. 日琉祖語

青森から琉球列島の最南西の島々に至る日本列島に分布する諸方言を言語学的に「比較研究」することにより再構される（服部 1967[2018: 30]）

(1-4)　本発表の概要

(1) 日本祖語の母音体系と中央方言における狭母音化に関する先行研究について
(2) 出雲方言における音変化と出雲方言が「非中央方言」的特徴を持つことについて
(3) **伝統方言の記述研究と比較方法について**

2　日本祖語の母音体系と中央方言における「狭母音化」

(2-1)　服部（1978-79[2018: 335]）

- 日本祖語の母音音素として/i, e, a, ə, ü, o, u/を再建

(2-2)　奈良時代中央方言（8 世紀，上代語）における「狭母音化」を想定（服部 1976a ; 1978-79[2018: 336]）

(4)

東国・九州・琉球方言		**日本祖語**		上代語
*e	<	*e	>	/i/（イ列甲類母音）
*e	<	*əi	>	/i/, /ii/（ともにイ列乙類母音）
*o	<	*o	>	/u/

cf. 上代語における/e/（エ列甲類母音），/o/（オ列甲類母音）は日本祖語の長母音/ee/，/oo/や母音連続/ia/, /au/から生じた（服部 1978-79[2018: 336] など）

(2-3)　琉球方言等と上代語の音対応

(5) 日本祖語 *e（服部 1978-79[2018: 317-318]；同 1976b[2018: 84]）

	日本祖語	上代語	奄美・大和浜	首里
「水」	*me$^{(n)}$du	ミ$_{甲}$ヅ	mɨdzi	mʲidzi
「道」	*miti	ミ$_{甲}$チ	mʲitʒ'i	mʲitʃi
「雨」	*amai	アメ$_{乙}$～アマ-	ʔamɨ	ʔamʲi

(6) 日本祖語 *əi（服部 1979[2018: 444]）

	日本祖語	上代語	首里
「木」	*kəi	キ$_{乙}$～コ$_{乙}$−	ki:
「月」	*tukui	ツキ$_{乙}$～ツク-	tsitʃi
「着る」	*ki	キ$_{甲}$	tʃi-
「酒」	*sakai	サケ$_{乙}$～サカ-	saki

(7) 日本祖語 *o（服部 1976a[2018: 62-63]）

	日本祖語	上代語	上代東国
「立つ」（終止形）	*tatu	タツ	タツ
「立つ」（連体形）	*tato	タツ	タト

cf. 首里：/tatuna/《立つな》；/tacu/《辰》

(2-4)　服部（1976b[2018: 84]）

たとえば「水」は，奈良朝中央方言で midu，東京方言で mizu，土佐方言で mĩdu，沖縄首里方言で mizi だから，奈良朝の形をそのまま日本祖語形としてよさそうだが，そうすると奄美大島の mïzi が例外となる。一方，隠岐，島根，鳥取などにmezu, mezi，青森に medzu，津軽に menzi があるから，日本祖語形としては*me^{n}du（中略）を立て，日本祖語から奈良朝中央方言へ*e→i という変化が起こったけれども，周辺諸方言ではそういう変化が少なくとも一次的には起こらなかったとすべきことが明らかとなる。

(2-5)　各方言内部で二次的に i > e という変化が起こった可能性も

(8) 出雲方言における「水」と「道」（発表者による調査）

(a)「水」medʑɯ̈　cf. PJ: *me$^{(n)}$du

(b)「道」metsɯ̈　cf. PJ: *miti

3　出雲方言における音変化について

(3-1)　先行研究：国広（1963）＝出雲（市）方言の音韻体系に関する共時的な記述

- 共通語との音対応の概略を提示も，比較言語学的観点からする考察はない

(9) 国広（1963: 22-24）が示した音対応（共通語：出雲市方言／環境）

(a) u：o ／ # __

(b) u：o ／ { m, n, b, p } __ C{ i, u }

(c) u：i ／ { m, n, b, p } __ C{ a, e, o }

- 共通語の/i/については，語頭で出雲市方言の/e/に対応することを指摘するも，その他の場合については「-i のままのことも多いが-e が対応することもある」と述べるのみ（国広 1963: 24）

(3-2) 今回扱うのは南部の旧仁多町域で離される仁多方言

- 調査協力者は，奥出雲町佐白（さじろ）（旧仁多町佐白）にお住いの UH 氏（1925 年生，女性）

表 1　出雲方言内部の地域差の例（廣戸 1950 と発表者自身の調査結果による）

	北西部 （出雲市）	南部 A （旧仁多（にた）町）	南部 B （旧横田町）	北東部 （安来市）
「見ない」	miraɴ	miɴ	miɴ	miɴ
「行こう」（意志）	eka	ekaː	ekaː	eka
「傘」のアクセント	尾高型	尾高型	頭高型	頭高型

(3-3) 仁多方言の音素目録。長母音は，同一母音の連続と考える

(10) 音素目録
  (a) 母音音素：i[i ~ ɨ ~ ɨ̞], u[ɯ], e[e ~ e̞], o[o ~ o̞], a
  (b) 子音音素：p, b; t, d; c[ts~ tɕ], z[dz~ dʑ]; s[s ~ ɕ]; k, g; h[h ~ ç ~ ɸ]; m, n; r[ɾ ~ ɽ], w, j; ɋ（促音）, ɴ（撥音）

(3-4) /c, z, s/の後では，/i/は現れるが，/u/は現れない。音声実現は [ɨ ~ ɨ̞]。

(11) /c, z, s/＋中舌母音の音節を含む語
  (a) kɯ̥dʑɨɾa「鯨」
  (b) osɨ̞「牛」
  (c) etsɨ̞̥go「苺」
  (d) tsɨ̞no ~ tɕɨno「角」

(3-5) 出雲方言の「ラ行子音」は「東京方言などと違って語頭・語中共そり舌摩擦音で，英語の r と同類である」（国広 1963: 22）

(12) /r/の音価
  (a) kᶜiːɽi「胡瓜」
  (b) ɽiːkᶜie̞mo「さつま芋」

(3-6) 共時的な音素配列に関わること

(13) /nu/, /mu/, /bu/を含む語はほとんどない
  (a) nɯma「沼」（新語。方言形としては/cicimi ~ ciciɴ/がある）
  (b) kᶜɨnɯ ~ kᶜɨɴ「絹」
  (c) kamɯː「被る」（新か。別に/kaberu/[kabjae] がある）

(14) /ni/を含む語はほとんどない
  (a) nɨta「煮た」（後述）
  (b) nɨno「布」（新か。方言形としては/cigi/がある）

(15) /hi/を含む語はほとんどない

(a) ɸaː ~ ɸɯː ~ çɨː「昼」

(b) çɨːɽɨ ~ ɸɯːɽɨ「蛭」

(c) açɨː「アヒル」（昔はいなかった）

(16) その他

(a) 語頭に/i/, /u/は立たない

(b) 母音単独音節/u/はない

(c) /ju/はない

(d) /ru/を含む語は少ない

(3-7) 上代語と仁多方言の対応

(17) 上代語 u：仁多方言 o（表 2）

(a) u：o ／ # __

(b) u：o ／ m __ C{ i, u, e, o }

(c) u：o ／ n __ C{ i, u, e, o }

(d) u：o ／ b __ (C)i

(e) u：o ／ #j __ r

表 2　上代語と仁多方言の**音節**対応（1）上代語 u：仁多方言 o に関わるもの

	上代語	仁多方言	語例（仁多方言の形）
(a)	ウ	o	orɨ ~ oː「瓜」，osɨ「牛／臼（／雄）」，omɨ ~ oɴ「海／膿」・・・
(b)	ム	mo	mogi「麦」，mosɨ「虫」，mosɨme「娘」・・・
(c)	ヌ	no	nokɨː「温い」，noreru ~ norjae「濡れる」・・・
(d)	ブ	bo	kobosɨ「拳」，kʷaːbosɨ「踝」，oboi「産湯」，bota「豚」・・・
(e)	ユ	jo	jorɨ ~ joː「百合」，jorjae「揺れる」，jorɨː「緩い」・・・
(e′1)	ユ	V	ɸɯː「冬」，ʨɨ̈i ~ ʨɨ̈ː「梅雨」
(e′2)	ユ	i	i「湯」，kai「粥」，oboi「産湯」
(e′3)	ユ	e	ekɨ「雪」，ezɨ「柚子」・・・

(18) 上代語 i：仁多方言 e（表 3）

(a) i：e ／ # __

(b) i：e ／ m __ C{ i, u, e, o}

(c) i：e ／ n __

(d) i：e ／ h __ Ci

表 3　上代語と仁多方言の**音節**対応（2）上代語 i：仁多方言 e に関わるもの

	上代語	仁多方言	語例（仁多方言の形）
(i)	イ	e	eto「糸（／干支）」，eno「犬」，emo「芋」・・・
(j)	ミ	me	mezɯ「水」，mezo「溝」，megɨ「右」・・・
(k)	ニ	ne	nesɨ「西」，nena「蜷」，negjaː「握る」・・・
(k′)	ニ	nɨ	nɨta「煮た」
(l)	ヒ	he	hesɨgata「菱形」，hezɨ「肘」，hebi「ひび」，・・・

(19) その他（表 4）

(a) u：i ／ m __ Ca

(b) u：i ／ b __ C{ a, u, e, o }

(c) u：e ／ n __ Ca

(d) i：u ／ ɸ __ C{ a, u, e, o }，ɸ __ #

(e) i：i ／ m __ Ca，m __ #

表 4　上代語と仁多方言の**音節**対応（3）その他

	上代語	仁多方言	語例（仁多方言の形）
(f)	ム	mɨ	mɨkasɨ「昔」，mɨkago「むかご」，mɨnanto「胸」・・・
(g)	ブ	bɨ	kabɨto「兜」，momotabɨra「腿」，kobɨra「脹脛」，mabɨta「瞼」・・・
(g′)	ブ	bɯ	kabɯ「蕪」，habɯ ~ habɨ「歯茎」
(h)	ヌ	ne	neka「糠」
(m)	ヒ	ɸɯ	ɸɯtotsɨ「一つ」，ɸɯza「膝」，ɸɯ「火」・・・
(n)	ミ	mɨ	mɨnaɴ「南」，mɨnato「港」，mɨɴ「耳」・・・

(3-8)　仁多方言における母音をめぐる音変化

(20) (a) *u > o**【母音の低下】**／ # __，{m, n} __ C{i, u, e, o}，#j __ r【!?】，b __ (C)i【!?】

(b) *i > ɨ**【中舌母音化】**

(c) *u > ɨ**【中舌母音化】**／ {m, n} __ (Ca)，#j __【!?】，b __ C{a, u, e, o}【!?】

(d) ɨ > e**【母音の低下】**／ # __，m __ C{ɨ, u, e, o}，n __，h __ Cɨ

(3-9)　**r の隠在化**：仁多方言を含む出雲方言では広く観察される

(21) *(C)Vr{i/u} > (C)Vː　（V は a か o）

(a) toː「鳥」（ *tori）

(b) haː「春」（ *haru）

(3-10)　**r 脱に伴う特殊変化**：仁多方言と横田方言の一部で観察される（廣戸 1950: 40-42 も参照）

(22) (a) *Cur{i/u} > C(ʷ)aː

ex. kʷaːma「車」；ɸaː「降る」；tsaː「釣る」

(b) *Cir{i/u} > Cjaː

ex. kjaː「霧／切る」；mjaː「見る」；njaː「煮る」；tsaː「散る」【!?】

(c) *(C)er{i/u} > (C)jae

ex. ɕae「芹」；jae「襟」；negjae「逃げる」

(3-11)　各変化の相対年代について（1）：「r の隠在化・r 脱に伴う特殊変化」と「中舌母音化」

- 古代語の「釣る」と「散る」に対応する語は，仁多方言でどちらも [tsaː]/caa/（[ʈʈʂaː]「散る」）
- 「する」と「知る／汁」も，仁多方言ではどちらも [saː]/saa/（[ʈʂaː]「知る／汁」）

→ r 脱に伴う特殊変化に先んじて中舌母音化が起こった

= 中舌母音化によって/c[ts~ tɕ], z[dz~ dʑ]; s[s ~ ɕ]/の後で/i, u/の対立が失われた後に r 脱に伴う特殊変化が起こった

(23) *Cɨr{i/u} > Caː の例

(a) *tsɨri > tsaː：tsaː「釣り」，tsaːmeɴ「ちりめん」

(b) *sɨri > saː：saː「尻」，saːmi「すり身」

(c) *zɨru > zaː：kezaː「削る」

(3-12) 各変化の相対年代について（2）：「r の隠在化・r 脱に伴う特殊変化」と「*u > o」

- 「*u > o」が起こってから，r の隠在化・r 脱に伴う特殊変化が起こった
  - 「死ぬ」[sʉ̈noː]/sinoo/< sʉ̈moru < *sinuru（[†sʉ̈naː]/†sinaa/）

(3-13) 各変化の相対年代について（3）：「r の隠在化・r 脱に伴う特殊変化」と「*i > e」

- 表 3 の (k′)[nɨta]/ni-ta/「煮た」
  - 「上代語ニ：仁多方言 ne」という対応（表 3 の (k)）の唯一の例外（「仁多」は/neta/）
  - 非過去・終止連体形「煮る」は [njaː]/njaa/
- 「*i > e」よりも**前に**「r の隠在化・r 脱に伴う特殊変化」が起こり，[njaː]「煮る」に
  - 「寝る」は [njae]
- 後に*i > e という変化が起こった
  - 「煮る」の語幹末母音/i/[i] が，[njaː] の存在に支えられて保持された？

(3-14) 各変化の相対年代について（4）：まとめ

(24) (i) 母音の低下 *u > o

(ii) 中舌母音化

(iii) r の隠在化・r 脱に伴う特殊変化

(iv) 母音の低下 *i > e

(3-15) (24) の音変化と相対年代を想定すれば，基本的に現代仁多方言の形式は古代語（＝中央方言）の形式から変化したものとして，矛盾なく説明可能

- 「薬」を意味する [kɯsoː]/kusoo/は例外的
  - 上代語の kusuri という形式が祖形ならば，仁多方言では [†kɯsaː] という形で現れるはず
    cf.「すり身」は [saːmɨ]/saami/
  - [kɯsʉ̈ː]/kusii/という形式も見られるが，標準語形（/kusuri/）からの類推による形式

(3-16) 上代語（古代語）の「ス」は，一般に出雲方言の [sʉ̈]/si/に対応し（ex. [sʉ̈sʉ̈]/sisi/「煤」など），両者の共通祖語の段階では*su と再建可能

- 「煤」などの「ス」と「薬」の第二音節は互いに異なるものを祖語の段階に再建すべき

(3-17) Pellard（2013）は，「薬」の日本祖語形を*kusori と再建（Thorpe 1983 も参照）

- 出雲方言の [kɯsoː]/kusoo/「薬」の母音 o も，この日本祖語形の第二音節の母音に遡るものと考えれば説明可能
- 仁多方言における kusoː「薬」の第二音節の母音 o は二次的に生じた蓋然性が低く，日本祖語の*o を保存するもの

＝ 中央方言が経験した狭母音化*o > u を出雲（仁多）方言が経験しなかったことを示唆

cf. [sʉ̈rosʉ̈]「印」（[†saːsʉ̈]）；[soso]「裾」

- ただし、日本祖語の半狭母音*e について，出雲方言は発言力を持たない

(3-18) 服部（1978-79[2018: 336]，一部改変）

(25) 拙論「琉球方言と本土方言」【=服部 1976】において，この狭母音化は，奈良時代の東国方言や九州方言には起こっておらず，その痕跡が現代八丈島方言や現代九州方言に見られる，と説いた。これは，日本語の歴史を考える上に重大な意味を有する事実であると思う。特に，「中央方言」の地理的範囲が問題である。中央方言が四周の方言を同化した勢力は，奈良時代以前から強力であったと考えられ，現在では，本土全域をほとんど覆いつくしたと言ってよい状態であるから，「奈良時代中央方言」の地理的範囲を実証的に研究する手立てはない，と言ってよい。しかし，私の言語学的直観による推定をかいつまんで述べれば，この重大な音韻変化の起こった震源地は，奈良・京都・大阪を中心とする近畿式アクセント（甲種アクセント）系の方言の祖語ではないかと考える。もちろん，この音韻変化が起こったのは，この系統の方言が日本祖語から分岐して，大和地方さらには畿内地方に地理的に確立してから後のことである。

4 伝統方言の記述研究と比較方法について

(4-1) 問題は（特に本土の）諸方言の「精密な記述」がどこまで可能であるか，ということ

- 出雲方言の調査で「「薬」という語はどう発音しますか？」と質問すると，ほぼ全員が第一回答として「[kɯsɨ̈ː]」と答える

(4-2) 伝統方言の記述の場に生かすべき「理論」としての**比較方法**

- 調査において余計な「思い込み」は邪魔だが，「思い込み」と理論的な「予測」とは別
  - 形態統語論の調査研究における言語類型論的観点からの予測・説明
- [kɯsɨ̈ː] を「伝統的方言形」と疑う余地は（一見すれば）ない
  - 話者が第一回答として発音，中舌母音化・r 脱などの音変化を経験した形式
    - 実際には [kɯsoː] という形が存在。それこそが出雲方言における「伝統的方言形」
    - [kɯsɨ̈ː] は，標準語形からの類推によって生じた新形式
- 音韻論的記述における「比較方法」的考え方の必要性
  - 通時的な問題だけでなく，共時的な音配列論（phonotactics）にも関わる

(4-3) 発表者の調査研究における今後の計画

- 先行研究に基づいて，可能な限り全ての語彙について日本祖語形を再建
  - 再建された祖語形が当該方言における音変化を経験するとどのような形式として現れるかを予測しつつ調査
  - 従来，あまり考慮されてこなかった同一語根の音声・音韻的変異を詳細に記述
  - 「当該方言の共時的音韻体系・音韻構造の解明」と「比較方法による当該方言内部の音変化の再建」
  - 従来の説に基づく再建形の見直しも期待
- 「非中央方言的特徴」を持つとされる本土方言の調査研究
  - 東国系諸方言を手始めに
- 奈良大和方言（上代語の直系の子孫？）の位置づけも
  - 『日本国語大辞典』「蚯蚓」の項に「メメヅ〔大和〕」の記載あり

参考文献

国広哲弥 (1963)「島根県方言の発音」廣戸惇・矢富熊一郎（編）『島根県方言辞典』17-33．島根県方言学会.

服部四郎 (1967)「日本語はどこから来たか」『ことばの宇宙』2(4): 1-10, 15.【服部 2018: 23-36 に所収】

服部四郎 (1976a)「琉球方言と本土方言」伊波普猷生誕百年記念会『沖縄学の黎明—伊波普猷生誕百年記念誌—』7-55. 東京: 沖縄文化協会.【服部 2018: 45-81 に所収】

服部四郎 (1976b)「日本祖語の母音体系」『朝日新聞』1976 年 6 月 22 日夕刊.【服部 2018: 83-85 に所収】

服部四郎 (1978-79)「日本祖語について (1)-(22)」『月刊言語』1978 年 1-3, 6-12 月号，1979 年 1-12 月号，7-1: 66-74; 7-2: 81-91; 7-3: 81-90; 7-6: 98-107; 7-7: 97-105; 7-8: 88-96; 7-9: 90-101; 7-10: 94-103; 7-11: 108-117; 7-12: 107-115; 8-1: 97-106; 8-2: 107-116; 8-3: 87-97; 8-4: 106-117; 8-5: 114-123; 8-6: 118-125; 8-7: 110-119; 8-8: 108-116; 8-9: 108-118; 8-10: 105-115; 8-11: 97-107; 8-12: 100-114，大修館書店.【服部 2018: 87-401 に所収】

服部四郎 (1979)「音韻法則の例外——琉球文化史への一寄与」『日本学士院紀要』36（2）: 53-77.【服部 2018: 439-472 に所収】

服部四郎 (2018)『日本祖語の再建』(上野善道 補注) 東京：岩波書店.

廣戸惇 (1950)『山陰方言の研究』島根県立教育研修所.

Pellard, Thomas (2013) 'Ryukyuan perspectives on the Proto-Japonic vowel system' In: Frellesvig, Bjarke & Sells, Peter（eds.）*Japanese/Korean Linguistics* 20: 81-96, University of Oxford - University of London. Stanford: CSLI Publications.

Thorpe, M.L. (1983) *Ryukyuan language history*. Ph.D. thesis, University of Southern California.

【付記】

本研究は，JSPS 科研費 17K13465, 17H02332（代表者：五十嵐陽介氏）の助成を受けたものです。また，本研究で用いたデータには，国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（代表：木部暢子氏）の支援を得て行った調査結果が含まれます。

いつも調査にご協力をいただいている，出雲地域，特に奥出雲町の皆様に感謝申し上げます。

上野善道先生は，発表者の研究方針と問題意識に共感くださり，折に触れてご助言をくださいました。本研究の着想に至った背景には，上野先生が編集された『日本祖語の再建』（服部 2018）の編集・校正のお手伝いをさせていただいたことがあります。また，服部旦先生には，服部四郎の研究における出雲方言の位置づけなどについてご教示をいただきました。お二人の先生の学恩に感謝いたします。